

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 468 回 つもりちがい10カ条

2012. 4.15

先日ある旅館の事務室の壁に、「つもりちがい 10 カ条」なる大きな掲示を発見、えらく感激したので、許可を得て、コラムに使わせて頂くこととした。

つもりちがい10カ条

高いつもりで低いのが教養
低いつもりで高いのが気位
深いつもりで浅いのが知識
浅いつもりで深いのが欲望
厚いつもりで薄いのが人情
薄いつもりで厚いのが面皮
強いつもりで弱いのが根性
弱いつもりで強いのが自我
多いつもりで少ないのが分別
少いつもりで多いのが無駄

人間、どうしても「思い違い」がある。

自分だけは絶対「そうではない」と言う思い違いである。

この10カ条、いずれも全くもってその通りなのだが、どうして、こんな思い違いが起こるのか・・・？そんなことを考えてみた。

明らかにこの考えの根底にある思想、先ず、自分自身の「思い上がり」である。

「私は本来 だから・・・」

「私はあなたほど××だから・・・」

常に「私」と言う存在から思考が始まっている。

まるでかつてのナチズムではあるまいが、優性人種のみ存在価値があるといわんばかり、その際たるものが「私」と言う発想が支配している。

そこにたとえば、「あなた」と言う相手の立場を出発点にしたら、この発想は随分違ってくるはずである。前例の言葉は、「あなたに比べたらまだまだ・・・」、「あなたのために何が・・・」と変わるかもしれない。

相手の存在を認め、尊重する考えから出発すれば、「つもりちがい」のいくつかは削除されるはずである。

それともう一つ、「つもりちがい」現象の根底には、自分自身への「甘さ」がある。

自分かわいさゆえ、自分を責めたくない、自分が可哀想だから辛い思いをかけさせない・・・これが「甘え」の原点である。

だからいつも、つい逃げてしまう。やらないうちから「できない」と思い込む逃避癖が身についてしまう。

こんな人間ばかりの世の中では、試合、競争には絶対勝てない。オリンピックも参加するだけである。莫大な費用をかけて、参加するだけに意義があるスポーツ大会なら、やめた方がいいと思ってしまう。スポーツは「勝つこと」に最大の目標がある。試合開始前から逃げ腰の選手が勝つことができないのは至極当然の帰結である。

逃げないとは、実は自分自身との戦いである。スポーツも同じ、強い相手との戦いではなく、弱い自分との戦いである。昔の人はこのことを「克己」と呼んだ。

「つもりちがい」の要因は、ジコチュウ(自己中心)からくる「相手への思い遣り」の欠如、チェンジチェア精神(相手の立場になる)の欠落、そして何事にもくじけない「克己心」の欠如・・・、どうも、現代日本人を象徴する現象かも知れない。